



デジタルカメラ ソニーCDマビカ MVC-CD300

資料登録番号
2007-61

科学研究に革命を起こした発明はいくつもあります。その中で、写真はコンピュータと並んで、科学研究に、特に貢献してきた発明です。私も学生の時には天文学の勉強の他は、写真とコンピュータについて特に学びました。

大容量のデータを一瞬で記録すること、そしてそのデータを高速に処理できるということにより、人間の感覚ではとらえられない自然界の秘密がつきとめられ、法則が発見されてきました。そのため、科学館には写真とコンピュータ関係の資料が非常に多く収蔵されています。また逆にこれら技術の進歩には科学研究が大きく貢献しているのですが別の機会に紹介します。

ところでここで紹介するデジタルカメラ ソニーCDマビカは、2001年に発売された製品です。300万画素のCCDセンサーを備え、3倍ズーム。大阪市立電気科学館のプラネタリウムと同じカルツアイス社のレンズを使っています。というだけなら、まあ当時のちょっとハイスペックなコンパクトデジカメ、というくらいです。が、この製品の特徴は、レンズの背後が丸くなっていて、そこにCD-Rドライブが内蔵されていることです。いまでもSDカードなどがデジタルカメラの記録媒体になっていますが、当時のメモリーカードは32Mバイトがせいぜいで、これでは30枚程度しか画像が記録できず、しかも1枚数千円と高価でした。

そこでソニーは、自社が開発したCDの技術を活かし(CDは振動に弱く、持ち運び媒体に使うのは高度な技術が必要)、最大で156Mバイトが記録できる小型CD-RWドライブをデジカメの記録媒体にしたのです。小型CD-RWはアダプターを使えば、当時一般向けのコンピュータ(PC)の標準装備となっていた通常サイズのCDドライブで読み込むことができました。当時はデジカメとPCの間の通信速度も遅かったので、これは理にかなったものだったのです。実はソニーはこの前の1997年にフロッピーディスクに記録するマビカを発売しており、その後継ともいえます。ただし、その後あつというまにメモリーカードは大容量化と廉価化が進み、PCとのUSB接続も高速化したこともありCDマビカは2003年発売のMVC-CD500が最終製品となりました。

渡部 義弥(科学館学芸員)

